

令和七年度 全国漢文教育学会大会

令和七年六月二二日（日）國學院大學渋谷キャンパス

早稲田大学先端社会科学研究所 招聘研究員 関口直佑

江戸後期の藩校教育 ―水戸弘道館を例として―

はじめに

水戸の弘道館は、藩主徳川斉昭による藩政改革の一環として計画されたものであり、天保一二年（一八四一）の仮開館から明治四年（一八七一）まで、幕末から明治にかけて続いた藩校である。弘道館の敷地は、五万七千坪（十七万八千二百平方メートル）ほどあり、加賀明倫堂の一万七千八百二十坪、長州明倫館の一万四千坪と比較しても広大なものであった。また敷地内には、正庁、至善堂、文館、武館、歌学局、兵学局、音楽局、天文数学所、医学館、鹿島神社、孔子廟、八卦堂、学生警鐘が設置され、調練場と馬場もあった。これらの施設から考えても、当時の総合的教育機関であったことが見て取れよう。そして弘道館の教育方針が述べられた「弘道館記」には、神儒一致、忠孝一致、文武一致、学問事業一致、治教一致が記され、実践的学問を追究する学校であったことが理解できる。

弘道館の初代頭取に任ぜられた会沢正志斎は、幕末の志士の必読書とされた『新論』の著者でもあり、当代一流の学者であった。先の「弘道館記」が公示されたのは天保九年（一八三八）であるが、正志斎はこれより約八年前に『学制略説』と「学問所建設意見書稿」を認め、今後必要とされる学校制度についても提示していた。『新論』が国際化に直面している日本の現状を、人々に開示した書物とするのであれば、その著者による教育構想は、次世代を意識した学校教育を目指したものと考えることもできよう。そこで本発表では、弘道館教育の背景と理念、そして正志斎の教育思想を紹介することで、新時代を見据えた教育内容と漢文古典の役割について、その概要を示していくこととしたい。

一、国際情勢の変化と学問観

①『新論』「形成」文政八年（一八二五）宮内庁書陵部所蔵。

夫古者夷狄為邊患者、熊襲也、隼人也、蝦夷蝦狄也、及其馴服、而海外修貢者三韓也、肅慎渤海諸國也、其為寇賊者女真蒙古、（女真既破契丹、將侵宋、寬仁中寇筑紫、世稱為刀伊賊、後二百餘年、蒙古強盛、称雄西北、將併宋、亦寇筑紫、是其為寇害者、皆在彼凶南之時也、）而阻狂瀾怒濤、卒不能為深患、當是之時、神州四面皆海、号為天險、今西夷駕巨艦大舶、電奔數万里、駛如風颭、視大洋為坦路、數万里之外、直為隣境、四面皆海、則無所不備、向者所謂天險者、乃今之所謂賊衝也、而保疆安邊者、豈得執疇昔之跡、以論今日之勢哉。

（夫れ古者、夷狄の邊患を為せしものは、熊襲なり、隼人なり、蝦夷、蝦狄なり。その馴服するに及びて、海外の貢を修めしものは三韓なり、肅慎、渤海の諸國なり。その寇賊をなせしものは、女真、蒙古なり「女真是既に契丹を破り、將に宋を侵さんとし、寛仁中、筑紫に寇す。世に称して刀伊の賊となす。後二百餘年、蒙古強盛にして、雄を西北に称し、將に宋を併せんとし、また筑紫に寇す。これその寇害をなせしもの、皆、彼の南を図るの時に在りしなり」。而して狂瀾怒濤に阻まれて、卒に深患をなす能わざりき。この時に當たり、神州は四面皆海にして、号して天險となせり。今、西夷は巨艦大舶に駕し、電奔すること數万里、駛すること風颺のごとく、大洋を視て坦路となし、數万里の外も直ちに隣境となす。四面皆海なれば、則ち備えざるところなし。向に所謂天險なりしものは、乃ち今の所謂賊衝なり。而るに疆を保ち邊を安んずるもの、豈に疇昔の跡を執りて、以て今日の勢を論ずるを得んや。）

②『新論』「国体 中」文政八年（一八二五）宮内庁書陵部所蔵。

論者徒見治強之跡、而忘衰弱之勢、頑然視猶文祿慶長之舊、何其惑也、今虜犬羊之性、雖不足与較長短、而其俗殘忍、日尋干戈、勢不得愚弱其民以自立國、故闔國皆可籍為兵、又徵役海外諸蛮、未可侮以為寡也、各國戰爭、民習於兵、未可侮以為弱也、用妖教以誘其民、民心皆一、足以戰矣、巨艦大礮、固其長技、足以嚇人矣、由是每雄視海上、逞其吞噬、未可侮以為愚也、而今欲応之、豈可徒恃自愚自弱之餘謀安坐高枕、無所變通哉、愚民弱兵、雖為治之奇策、而利之所在、弊亦随之、不得不矯之、今幕府之議既決擯虜、則轉寡為聚、更弱為強、其勢之不可得已者也、

（論者はただ治強の跡のみを見て、衰弱の勢を忘れ、頑然として視ること、なお文祿、慶長の舊のごとし。何ぞそれ惑えるや。今、虜は犬羊の性にして、与もには長短を較ぶるに足らずといえども、しかもその俗は殘忍にして、日に干戈を尋ぎ、勢その民を愚弱にして、以て自から國を立つるを得ず。故に闔國皆籍して兵となすべく、また役を海外の諸蛮に徴すれば、未だ侮りて以て寡となすべからざるなり。各國戰爭し、民は兵に習えば、未だ侮りて、以て弱となすべからざるなり。妖教を用いて以てその民を誘い、民心皆一なれば、以て戦うに足る。巨艦、大礮は、固よりその長技なれば、以て人を嚇すに足る。これに由りて毎に海上に雄視し、その吞噬を逞しくすれば、未だ侮りて以て愚となすべからざるなり。しかも今、これに応ぜんと欲す。豈にただ自から愚にし自から弱むるの餘謀のみを恃みて、安坐高枕し、變通するところなかるべけんや。民を愚にし兵を弱くするは、治をなすの奇策なりといえども、しかも利の在るところ、弊もまたこれに随へば、これを矯めざるを得ず。今、幕府の議、既に虜を擯くるに決したれば、則ち寡を轉じて衆となし、弱を更めて強となすは、その勢の得て已むべからざるものなり。）

二、弘道館教育の特色

③「弘道館記」天保九年（一八三八）弘道館記碑文。

嗚呼我國中士民、夙夜匪解、出入斯館、奉神州之道、資西土之教、忠孝无二、文武不岐、學問事業、不殊其効、敬神崇儒、無有偏党、集聚思、宣群力、以報国家無窮之恩、則豈徒祖宗之志弗墮、神皇在天之靈亦將降鑒焉、

（嗚呼、我が國中の士民、夙夜解らず、斯の館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教を資り、忠孝二无く、文武岐れず、學問事業その効を殊にせず、神を敬い儒を崇び、偏党あるなく、聚思を集め群力を宣べ、以て国家無窮の恩に報いなば、則ち豈にただに祖宗の志、墮ちざるのみならんや、神皇在天の靈も、また將に降鑒したまわんとす。）

④『弘道館記述義』弘化四年（一八四七）彰考館所藏。

學問事業、不殊其効。

臣彪謹案、學所以學道、問所以問道、而事業所以行其道、譬諸工匠、必先學規矩然後從事於經營、抑天下工匠何限、其良者能建宮殿、造樓閣、雖其極拙者、未嘗有不堪一廬舍之役者焉、古今學者亦多矣、其事業卓然不朽者、何其寥寥也、夫天下之欲造宮殿樓閣者、必皆委任良工、雖一廬舍之微、亦必俟匠人而為之、故工匠常得試其規矩、至為国家則不必用學道之人、或用之亦不必任之、故學者常不得行其道、其勢然也、用与不用在人、學与不學在己、

（「學問事業、其の効を殊にせず。」

臣彪、謹んで案ずるに、「學」は道を學ぶ所以、「問」は道を問う所以にして、「事業」はその道を行う所以なり。これを工匠に譬うるに、必ず先ず規矩を學びて、然る後に經營に従事す。そもそも天下の工匠何ぞ限りあらん。その良き者は、よく宮殿を建て、樓閣を造る。その極めて拙なる者といえども、未だ嘗て一廬舍の役に堪えざる者あらず。古今の學者もまた多し。その事業の卓然として朽ちざる者は、何ぞそれ寥寥たる。夫れ天下の宮殿樓閣を造らんと欲する者は、必ず皆良工に委任す。一廬舍の微なるといえども、また必ず匠人を俟ちてこれを為る。故に工匠は常にその規矩を試みることを得るも、国家を為むるに至つては、則ち必ずしも道を學ぶの人を用いず。或いはこれを用うるも、また必ずしもこれに任ぜず。故に學ぶ者は常にその道を行うを得ず。その勢い然るなり。用うると用いざるとは人に在り、學ぶと學ばざるとは己に在り。）

三、会沢正志斎の教育思想

⑤『下学適言』『論學』 弘化四年（一八四七） 茨城県立歴史館所蔵。

教者所以明人倫、天叙有典、而聖人惇之、天秩有禮、而聖人庸之、父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序、朋友之信、皆寓之禮樂、少而習之、長而行之、所以納民於軌物、而教育英才、供國家之用矣、大學以舉俊秀、肆大禮大儀、小學以平居講習、爲入大學之資、大學之設、所以綱紀小學之教、而収其成功也。小學有門閭之學、有鄉黨之學、鄉學以教士民、要在養賢能勵風俗、門閭則以教國子、要在知國之中失、成宰輔之器、皆教以實事、而用之實行、故古之教者、成德達材、導以行事、而不喻以口舌、其所爲教者、易簡而易知、（教は人倫を明かにする所以なり。天、有典を叙して、聖人之を惇くす。天、有禮を秩して、聖人之を庸う。父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信は、皆之を禮樂に寓す。少うして之を習い、長じて之を行う。民を軌物に納れ、而して英才を教育し、國家の用に供する所以なり。大學は以て俊秀を舉げ、大儀大禮を肆わす。小學は以て平居講習し、大學に入るの資となす。大學の設けは、小學の教を綱紀してその成功を収むる所以なり。小學に門閭の學あり、鄉黨の學あり。鄉黨は以て士民を教う。要は賢能を養い、風俗を勵ますにあり。門閭則ち以て國子を教う。要は國の中失を知り、宰輔の器を成すにあり。皆、教うるに實事を以てして、之を實行に用う。故に古の教に、徳を成し材を達し、導くに行事を以てして、喻すに口舌を以てせず。その教をなす所の者は、易簡にして知り易し。）

⑥『息邪漫録』『學校』 嘉永五年（一八五二） 早稲田大学図書館所蔵。

西洋諸國、學校を設て人に教るハ盛事也。然とも其教とする所ハ天文、地理、醫術、物産、諸國の言語等のみにして、人倫を明にする事を不知。（中略）其教是等の事のみにして人倫を明にして忠孝仁義を以人心を磨礪する事ハ露はかりもなく、礼樂を以中と和とを教へ、風俗を正くする事もなく、教る所ハ巧藝と博物とに過す。人にして人倫を知さレハ禽獸に近し。心は禽獸にして巧藝博物のみなれハ蜘蛛の網を巧にし、蜂の巣を巧にするに異ならず。本なくして末を務るものハ巧緻廣博を極たりとも貴ふに足らず。故に足を嘔み口を嘗る類の陋習あり。人にして犬羊に等しと云へし。